

学生時代と図書館 50

— 学ぶ姿勢：知識と知恵 —

川口 榮一

昨今、大学生も学歴社会の揺らぎ、就職難、価値観の変化などを察し、将来に不安を覚え、実学重視（資格取得も含む）にシフトしつつある。

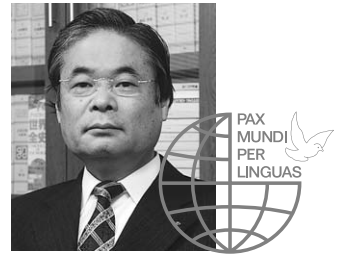
これは、熱意ある教員の指導による出席重視を謳い、学生に勉強志向を促す指導要領にもよる。当然、授業への出席率の向上には、学生達の授業への満足度も否定できない。特に、我が大学では、授業で出席をとり、それを成績に反映している要因も考えられる。勿論、学生の大学生活の比重、「部活・サークル活動」と「学業・勉強」のかけ具合によるが、学生の「学業・勉強」への志向を高める自主性を願わざるを得ない。

願わくば、人は終身、学ぶ姿勢をくずす事なく、叡智を振り向け、知恵の集約にはげみ、知識の増長を目指すべきである。

つまり、理想郷を述懐しても机上論に終始するであろう。故に、人の論述にせよ、懐疑的に多岐にわたって見解して行くことこそが知恵の出どころではないだろうか。この知恵を検証するには、常日頃から書にしたしみ、精読することにより、トータル化した幅広い類推が生まれ、深層構造を見抜き、しいては、再発見につながる論述が生誕する。と同時に書にふれる喜びを覚えることうけあいなし。そう言う意味では、図書館は、知恵を注入してくれるガソリンスタンドであり、宝庫でもある。

読書と言えば、東京では今、大規模な書店がぞくぞく登場してきている。それも売

り場面積が三千平方メートルから六千平方メートルで、店頭在庫が七十万冊から百五十万冊の巨大書店がオープンしたと聞く。



その巨大書店の一つ、紀伊國屋書店の松原治会長は、「書店は劇場である。」とっておられる。劇場といわれる大きな書店では、思いがけない本との出会いに感動したり、膨大な蔵書の数々に自己の読破書物の少なさに何らかの刺激を受け、向学心を植え付けられるであろう。

学生諸君は、専攻、非専攻科目は別として、通常授業を通して、教授陣の手厚い指導のもと研鑽を積んでいくのだが、学生自身も学ぶ過程で、仮定的立証を打ち出すべく、関連書物の読破を試みるべきで、その問題意識を高める試練でもある。この試みがより高度な知恵を編み出すトレーニングの場になると確信する。

故に、常にモチベーションを持って、書に触れる機会と時間を持って頂きたい。特に、学生時代は時間的に肉体的に、精神的にも充分対応し得る資質を備えている柔軟な時期でもあると推定する。どうぞ実り多き学生生活をエンジョイして欲しい。

終わりに、北宋の王安石が読書の持つ意義を強調している勸学文の第二句より引用して結びとする：「書を読めば万倍の利あり」

これは、王安石が読書の心得に言及し、よい書物は読んで心に記憶して忘れぬようにしなさいと読書の利益を説いている。

かわぐち えいいち（教授・音韻学・語法）